



## チャイルド・ファーストの理念って？



### A. 障がいのある子どもである前に、ひとりの子どもである、ということですね

夏休みなどの長期休暇になったときに利用できるサービスに、いくつかのがあります。  
[児童福祉サービス](#)である[放課後等デイサービス](#)が代表的なものですが、他に国の障害福祉サービスとして、施設の[ショートステイ](#)、行動援護、重度訪問介護があり、市町村の地域生活支援事業として、日中一時支援事業、移動支援事業ですね。  
保護者の就労のための預かりのサービスとしては、[放課後児童クラブ\(学童クラブ\)](#)があります。

どれも同じように見えるかもしれませんが、「建物」が預かるサービスと「人」が預かるサービスとに大別できます。

ショートステイや放課後等デイサービスは、建物(場所)が預かるサービスということが出来ますね。

行動援護や移動支援は、マンツーマンでヘルパー(人)が預かるサービスと言えます。

いわば「場所貸しサービス」であるショートステイや放課後等デイサービスは、このキャパにこれだけの利用者、と決められています。

それに伴う必要経費の割り返しになるので、一人の利用者に一人の支援者、というわけにはいきません。

その場所を利用するのに[必要な数の職員](#)が配置されていなければならないのですね。

「人貸しサービス」である行動援護や移動支援は、マンツーマンになるので人件費は一人分出ることになります。

報酬単価も保障されるので、利用者のために職員を確保することができます。

同じような感じであっても、制度設計の観点からは違ったものになってくるのです。

次に、このようにいろいろとあるサービスをどう使いこなしていくか、というところに話の焦点が移っていきます。

大切なことは、周りの大人の意見や都合で利用するのではなく、本人の気持ちに沿って利用することかしら。

本人の「こんなふうに過ごしたい、こんなことをやってみたい、こんな経験をしてみたい」に焦点を当ててニーズを本人の言葉として具体的に共有されていなければいけません。

「この夏休みは、こんなところに気を付けてもらいながら、こんな経験をしてみたいんだ」  
こういった本人の希望に沿った上で、配慮をし、高い専門性をもってサポートしていくのですね。  
その中で、どのサービスを選んで利用することが良いのか、が見えてくるのです。

子どもに特化していえば、障がいがあるとしても「子ども」なので、利用できる子どもであるならば  
本来は「放課後児童クラブ」が第一候補に上がらなくてははいけません。

[児童発達支援](#)ではなくて、保育園や幼稚園、こども園が日中の場として優先されるべきものなの  
ですね。

現状は厳しいとはいえこの原則から外れてしまうと、サービスありきになってしまうのよ。

保育所から学校への引継ぎが丁寧になされて、それまでの支援の方法が確実に[放課後児童ク  
ラブ](#)に活かしていければ、[放課後等デイサービス](#)を利用しなくても支えていける子どもが増えて  
いきます。

縦横連携といわれるものですね。

そのためには、保育所で発達特性に配慮したかわりを積み上げて、その成果を丁寧に引き継  
いでいく働きかけが欠かせないものになってきます。

「本当はクラスの友達と元気に遊んでほしい。安心して地域で、あなたの特性に配慮した工夫を  
していってもらうことが、地域にとっての本質的に必要な課題なのよ」

「児童発達支援も大切だけど、保育所で友だちとたくさんの時間を過ごしてほしい。ここで身に付  
けた自信を、[保育所等訪問支援](#)を通して私たち支援するものが活かしていくから」

こう言いきれる現場の支援者が増えてほしいのです。

保育所から一貫してサポートを継続していく中で、そのサポートを小学校にも放課後支援の現場  
にも引き継いでいけば、放課後等デイサービスはより必要な子どもに届きやすくなるサービスとし  
て位置づけられるのではないかしら。

「障がいのある子どもである前に、一人の子どもである」というチャイルド・ファーストの理念を考  
えていく必要があるのですね。

## [《MENU》](#)

[《適切な量と質の支援って？》](#)

[《発達障がいの二次障がいって？》](#)

2023-05-01 掲載